



160形蒸気機関車<明治>

鉄道文化財を**考**える

シンポジウム



中等客車<明治>

●

これからの保存・活用のありかた

●

●

昭和**60**年**5**月**11**日<土>

芝弥生会館

●

プログラム

開会あいさつ…<13:30>

記念講演…<13:40>

岡部冬彦

漫画家

休憩<10分>

シンポジウム…<14:20>

コーディネーター=青木栄一

・東京学芸大学教授

ハネリスト=小池滋

東京都立大学教授

白井昭

大井川鉄道常務取締役

村上光彦

成蹊大学教授

閉会あいさつ…<16:50>

休憩<20分>

懇親会…<17:30~19:00>

主催——財団法人観光資源保護財団
〈日本ナショナルトラスト〉

後援——運輸省

協賛——日本国有鉄道 社団法人日本観光協会
財団法人交通協力会 財団法人交通文化振興財団
鉄道友の会 産業考古学会 鉄道史学会



完成した東京駅

鉄道文化財の保存を考える 青木栄一

鉄道が交通機関として用いられるようになってからすでに百数十年、日本の鉄道だけを考えても百年以上の年月が経過している。その間、鉄道は一般の人々の日常生活にとってなくてはならない交通機関となった。その意味で鉄道は一つの文化財であり、私たちが先祖から伝えられた貴重な文化遺産といえるであろう。

しかし、鉄道を文化財としてみる習慣は日本ではまだ十分定着しておらず、その重要性を鉄道史研究や産業考古学の活動を通じて、学校教育やマスコミのレベルで広くアピールする必要があると思う。

百数十年の歴史のなかで、鉄道そのものも大きな発達を示し、鉄道を支える技術も、人々の利用形態も絶えず変化してきた。たとえば蒸気機関車や古い形態の路面電車は技術革新やモータリゼーションの前に消えつつあるし、駅舎や橋梁などの鉄道施設もより機能的なものを求める動きのなかで更新されつつある。このような鉄道にかかわるさまざまな文化財のなかから価値あるものを保存し、私たちが私たちの祖先の生活のなかに生きた鉄道文化財を後世にのこすことは、私たちの世代の義務であると思う。

日本における鉄道文化財保存の現状をみると、もっぱら鉄道企業の経費負担によって行なわれているが、このことは恒久的な保存や文化財としての活用などの面からは必ずしも好ましいとはいえない。今後は地方文化の一環という認識の上で、地方自治体や地方史博物館がこの問題に関心をもつようになることを期待したいが、それ以上に一般の人々の1人1人が費用や労力を提供しての保存運動が必要であろう。欧米諸国における鉄道文化財保存は一般の人々のボランティア活動に支えられていることを銘記すべきである。また、ナショナルトラストがこれまでの文化財保存の経験やノウハウを保存活動に生かすことを期待したい。

鉄道文化財の保存は諸施設や車両を博物館などに静態展示するだけでなく、鉄道のシステム全体を生きた状態で保存する動態保存を是非考えたい。すでに梅小路蒸気機関車館や大井川鉄道における実績と経験の積み重ねがあるが、そこでは保存のための組織のあり方や維持のための経費の負担、地域社会とのかかわり方、技術の伝承の困難さなど多くの問題点が明らかにされている。

以上のようなさまざまな問題点をふまえて、鉄道文化財の保存運動を長期的な展望に立って進めてゆかねばならないと思う。



8620形蒸気機関車(大正)

千葉大学工学部卒、現在は東京学芸大学教授。

●日本の交通史の第一人者として知られている。技術畑の出身であり、その方面からのアプローチは、交通史におけるユニークな学問体系をつくりあげている。

●海外の交通史にも精通している。

鉄道ばかりか船舶における研究実績も豊富である。



051形蒸気機関車<大正>

保存とアマチュアリズム

小池 滋

まず基本原則として忘れてならないことは「おカミにお願いする」というような甘えた姿勢を捨てることでしょう。

正確に言うならば、現在日本には「おカミの」鉄道などないのです。ところが、いまだに国鉄や私鉄にお願いして、何とか無理して頂いて古い施設・車両などの保存をはかろうとする気持が、強く残っていることは否定できません。そうした鉄道企業体が裕福で、お金が余るほどあるならそれでよろしいでしょうが、現状では赤字に悩み、人員整理さえやらねばならぬわけで、そのために古いものをどんどん捨てようとしているのです。そうした時に、捨てたものに対して、さらにお金や人員を注ぎ込んで下さいとお願いしても、承知して貰えるはずはありません。

だから、その捨てられた——または、捨てられようとしている——貴重な文化財を守ろうというなら、それは鉄道企業体の外にいる人間が、手弁当で自腹を切ってやるしかないのは、当然のことです。

もちろん、鉄道企業体に属するプロの人たちは、それぞれの車両・施設について、長年のうちに身に着けた深い広い知識を持っているわけですから、それを教えて頂くことはぜひ必要です。外部のシロウトは謙虚にそれを学ぶべきでしょう。

しかし、それ以上の過大な要求を、まるで当然であるかのようにつぎつけるのは、無理難題というもので、いかに鉄道文化財を守ることが、後世

東京大学文学部英文学科卒
現在は東京都立大学人文学部教授。

●英文学において、特にディケンズの研究者として知られている。また日本ばかりか世界の鉄道に対して幅広い見識を持ち、著書も多数ある。

●旧尾小屋鉄道の車両や施設の一部を買い上げて保存をおこなっている赤門軽便鉄道保存会の代表でもある。最近の著書に「鉄道諸国物語」<彌生書房>がある。

信越線機部駅の3等普通客車
<明治34年ころ機関車はのちの2120形>



8700形蒸気機関車<明治>

